序文
・・・秀岑先生列伝・・・

中野 実

伝序；本伝は、中野実これを記述する。記述者は、本記念論集に関わる人物の中では最も早くから秀岑先生と交流のあった者である。当時早稲田大学の学生であった記述者にあっては、秀岑先生が団長の昭和初乙丑歳外務省全国学生訪韓団の一員として加わった時が最初の出会いであった。グレゴリオ暦千九百八十五年である。以来、折につけ連絡を取り合い、先生居宅の近くの東京大久保駅下の喫茶店で時に指導を受け、また時に談笑し、かつ議論した。その後、先生は居所を仙台、北京、ソウル、延辺等々と移しながらも、常に記述者には意を払ってくれた。特に記述者が東北大学大学院で研究生活を続けたときには厳しく指導を受けた。時は経、本年正月先生の古稀の年を画すべく、それぞれの地域での教え子たち有志が東京秋葉原に集まり、同門会発会宣言のもと、先生の号「秀岑」に因み、記述者はこれを「秀岑会」と称した。

秀岑先生成澤勝博士；

千九百四十九年昭和初己丑四月山形県庄内に生まれ育ち、高等学校卒業後、笈を負って上京。

早稲田大学第一文学部および同大学院において故目加田誠博士門下で中国文学を修めるなか、国より資金を得て千九百七十四年韓国高麗大学に留学し、朝鮮文学・文芸思想を研究。

帰国後は在京の韓国系人文社会科学研究機関「東京韓国研究院」に職を得、同院研究部長であった阿部吉雄博士のもとで朝鮮思想研究に、同院資料部長であった桜井義之氏のもとで朝鮮古文献研究に従事。

千九百八十三年には特殊法人・現独立行政法人国際交流基金の委嘱を受けて、駐大韓民国日本国大使館に赴任。

千九百八十五年に帰国し、拓殖大学、そして後に神田外語大学で教育職を得、朝鮮語学文学を講じるかたわらＮＨＫラジオハングル講座において両次にわたり朝鮮文学講読を担当。また、実践女子大学で漢文学を講じられた阿部吉雄博士の逝去後はその後任を担当。

この間、千九百八十九年には韓国高麗大学より論文『韓国孝感系叙事文学の研究』によって「文学博士」の学位を授与され、さらに同大学民族文化研究所より学術的高評価を得たことから、後には同研究所において出版が決定され、民族文化研究叢書６７『高麗・朝鮮時代叙事文学発展の研究』として上梓（日本国国立国会図書館NDLC：KJ53)。

大学院重点化の方針にあった東北大学に召されてはいたものの、移籍が正式に決定していたわけでもないことから、筑波大学からの招聘決定に応じたことにより、混乱を来した。ことの前より東北大学からの招聘事実を筑波大学が了知していたこ

とから、東北大学着任時には筑波大学が退いたことにより、事無きを得た。

東北大学移籍後も、教授職として北京大学（国際交流基金フェロー）や高麗大学（民族文化研究所研究専従）に籍を置いて、特に朝鮮における杜甫の詩の展開、伎楽など日本古代文化の一区画を占める「呉・クレ」の地の措定、ツングース系王朝「渤海」の崩壊と白頭山の関わり等に大きな研究成果を挙げたと記述者は見る。これら学術的業績については次項で略述する。

この間、学究活動を展開する一方では学術行政面でも多忙を極めていた。大学内では、身の安全も顧みず運動圏の学生たちと直に対峙しつつ良導し、また政府部内では専門委員として科学研究費補助金や大学・学校法人設置の審議会等で多くの時間を費やしていたが、その内実については未だに知る由もない。

記述者はこの時期において、東北大学大学院在職の秀岑先生に師事し、民族文化環境論を専修した。つまり、学内の苛烈な人間関係に鋭く対応していた秀岑先生の研究現場での目撃者でもあった。

二千六年の就任に向けて、すでに二千五年にはツングース諸族の活躍主舞台であった現在の中国東北部に構える延辺大学からの招聘を受け、教授職を得て高句麗―渤海文明の研究を深めていった。

教育の現場を離れてからは、若手研究者たちと定期的に朝鮮漢文の訓読会を開いて特に李朝実録の解釈と訓読を重ね、非常に精緻な解釈をウェッブ上に公開した。また、経団連の２１世紀政策研究所で講義を重ねるかたわら、在米の研究所の運営を委ねられ、ウェッブにサイトを設けて、研究成果を公表している。

秀岑先生学術業績簡介；

先生、日頃にのたまわく「学生たちのためにも概説文や入門書を書くべきであろうが、とうてい時間的にゆとりがない。自らの研鑽の成果を世に問うことで精一杯である。また、日本でこれを試みても“暖簾に腕押し”“豆腐に鎹”“糠に釘”で、自らに還元されるところがほとんど無い。自ずと韓国・北朝鮮・中国での発表となる。」ということであった。

関連する学界から異論も出ず、新たな学説として定着したと見るべき以下の四箇項目を見てみる。

《一》古くからの朝鮮の叙故事（物語）においてストーリーの提供元すなわち筋の取材先として社会教化のための「寓話類」があった。その「寓話類」といったところの大きな一角が儒典であり、そうした寓話類の主題（テーマ）は特に社会的要請の高く、また儒教徳目のなかでも中核的な「孝」「忠」「烈」であった。すなわち高麗朝鮮で流行した『蒙求』系の『三綱行実』がいわゆるネタ元であった。いわゆる儒

教倫理の教化物語である。秀岑先生はこうした社会教化のために寓話類が、その民衆教化のためのテーマを脱し、逆に時代の精神風土を反映し、民衆の心情を満足させるあらたな叙事構造を持つに至った文学史的事実を、特に「孝」をモチーフとした作品群を分析しつつ解明した。これは学位請求論文としてまとめられ、高麗大学より文学博士の学位を授与された。また、後にその水準が高く評価され、同大学民族文化研究所より「民族文化研究叢書」６７として出版された。この「民族文化研究叢書」は、現在韓国において、学術叢書としては最も長い歴史を有し、自他ともに最高水準として認めるところである。

《二》１５世紀時点での杜甫の詩全編が当時の朝鮮語によって解訳された。杜甫の詩自体、多くの編首に解釈の多様さが認められる中、朝鮮の解釈がどのような位置づけになるのかについては、不可避な課題であるにもかかわらずこれまで研究されたことがない。秀岑先生は、特に北京大学在勤時期に旺盛に杜甫詩のテキストを集め、それらを綿密に対校検証し、そうして杜詩の朝鮮的解釈解明の第一の関門である、朝鮮解訳が依拠した杜詩のテキストの策出を成し遂げた。そして現在、その１５世紀朝鮮解訳本の日本語による検証を続けている。

《三》『日本書紀』『続日本紀』等日本側古代資料の綿密な点検によって、いわゆる「クレ（呉）」が帯方に相当することを突き止め、朝鮮側歴史資料および考古資料によって、その地が朝鮮半島の海西地方に該当し、しかも中国史料からその支配者が漢代渡来の呉氏一族の後裔であったことを解明した。

《四》人類史的影響を及ぼしたと言われる、中国朝鮮国境の白頭山（長白山）の巨大噴火が渤海王朝を滅ぼしたとする説が日本では近年まで説かれてきた。また、中国や韓国のヒストリアンたちもこれに異を唱えなかった。しかし、やはり、中国側歴史書の言うとおり渤海王朝を滅ぼしたのは遼（契丹族）であり、むしろ、その後に渤海社会を破壊したのが白頭山の巨大噴火であった事実を、『遼史』に残された渤海時代の大河沿流邑落の変異相を検証することによって解明した。東北大学総合学術博物館もこの説を取る。

以上、今後秀岑先生のさらなる健勝と活躍を祈るばかりである。